「仕事満足度」120%マガジン
PHP BUSINESS
THE 21
ざ・にじゅういち
03 2010
No.304 PHP INSTITUTE
定価550円
平成22年2月10日発行　毎月1回10日発行　第27巻第3号　昭和60年1月22日第三種郵便物認可

「仕事ができる人」が実践している
戦略的㊙ノート術を一挙紹介!

各界のノートの達人が大集合

インスタントラーメンの発明者を父にもつ
日清食品HD社長の新成長戦略とは?
安藤宏基の「ハングリーの哲学」

トップ取材

総力特集

「仕事ができる人」はノートに何を書いているのか?

1冊のノートで
あなたの仕事が
ガラリと
変わる!

些細な情報を仕事の成果に結びつける
"超一流"の戦略的ノート術!

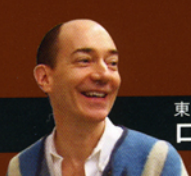
特集

"ついダラダラと仕事を続けてしまう"あなたへ!!
読むだけですぐに帰りたくなる「残業セラピー」

PROFESSIONAL INTERVIEW

俳優
藤原竜也

女優
中谷美紀



東京大学大学院教授
ロバート・キャンベル

「気になるあのデザイナー」との60分

水谷孝次

アートディレクター／グラフィック・デザイナー

勇み足であっても、何もしないよりはマシです

富も名声も得たのに心は満たされない日々

二〇〇八年に行なわれた北京オリンピックの開会式。そのフィナーレで、世界中の子供たちの笑顔をプリントした二千八本の傘がスタジアム全体を埋めつくした。

子供たちの写真を撮影した水谷孝次氏は、国内外で数々の賞を受賞してきたグラフィック・デザイナーだ。本業のかたわら、一九九九年には、世界中の人に「あなたにとってMERRY（楽しいこと、幸せなときなど）とは何ですか？」という質問を投げかけ、返ってきた笑顔とメッセージを集める「MERRY PROJECT（メリー・プロジェクト）」を開始。これまでに世界二十五カ国で三万人以上の笑顔を撮影してきた。そんな水谷氏に、「思い」を「カタチ」にする仕事術についてうかがった。

※

——北京オリンピックの開会式で水谷さんの写真が使われました。きっかけは何だったのですか。

水谷　開会式のディレクションを手がけた映画監督の張芸謀（チャン・イーモウ）が、世界中の子供たちの笑顔を使った演出を企画しているという記事を、うちのスタッフがたまたまインターネットで見つけたのです。僕は「MERRY PROJECT」で、世界中の人びとの笑顔を写真に撮り続けてきた、いわば笑顔の第一人者。これは僕

取材・構成　山口雅之　写真撮影：永井　浩

がやるしかないじゃないですか（笑）。それで、すぐにオリンピック委員会に電話をかけたのです。

――えっ、いきなりですか。

水谷　はい。そうしたら、すぐに資料を送ってほしいということになり、資料を送ると今度は「ぜひ一緒に仕事をさせていただきたい」という返事がきました。

――トントン拍子ですね。

水谷　ところが、それからがとんでもなくたいへんでした。イーモウ監督と直接会って了解を得たというのに、中国政府と北京オリンピック委員会は「被写体となっている子供一人ひとりにつき、出生証明書、住民票、両親の許諾書といった五種類の書類がすべて揃っていなければ認められない」の一点張り。その後、さんざん交渉をした結果、「いっさいの責任はMERRY PROJECTがとる」という条件で、なんとか契約を結ぶことができました。しかも、画像データを加工したり、送ったりする費用はすべてこちら持ちです。

それでも、開会式のラストで笑顔の傘が次々と開かれ、僕が世界中で撮影した子供たちの笑顔が「鳥の巣」の会場を埋めつくしたときは、途中であきらめないでよかったと心から思いましたね。

――広告業界の花形デザイナーだった水谷さんが、「MERRY PROJECT」を始めようと思ったのはなぜなのでしょう。

水谷　地下鉄の駅に貼ってあるポスターをみていたら、八割が僕の作品だったこともあります（笑）。大きな仕事は次々と舞い込んでくるし、預金通帳の残高は日に日に膨らむ。さらに、賞までもらえる。

それなのに、心は満たされず、身体もボロボロ。もともと僕は、デザインによって社会をよりよくしたいと思って、この世界に入ったんです。それなのに、当時はそのころの志を完全に忘れ、与えられる仕事をただやっているだけでした。「ここは、僕が若いときにめざした場所ではない。早く抜け出さなくては」。そう気づいた僕は、二十人いた事務所を畳み、一人で出直すことにしました。その結果、仕事も収入も激減しましたけど、ご飯はおいしく食べられるようになったんです。（笑）

――一人になって、デザインで社会をよくする仕事ができるようになったということですか。

水谷　いえ、しばらくは「世の中に希望を与えられるような仕事をしたいけど、具体的に何をすればいいのかわからない」という悶々とした日々が続きました。

そんなある日、僕は事務所で写真の束を見つけます。それは、アメリカを旅行中に、バスのなかで偶然出会った少女を撮ったものでした。その笑顔をみているうちに、「これから社会を変えていくのは、笑顔のポジティブなコミュニケーションだ！」という思いが抑えられなくなった僕は、これらの写真を写真集にまとめて出版することにしました。こうして「MERRY PROJECT」が始まったのです。

一人が動きだすことで物事は進みはじめる

――昨年秋に行なった、インドネシア・スマトラ島沖津波の被災現場に子供たちの笑顔の傘を広げるというプロジェクトも、思いついてからわずか一カ月で実現してしまったそうですね。「思い」を「カタチ」にする秘訣は何なのですか。

水谷　いちばん大事なのは絶対にモノにしてやるという強い気持ちと、何があっても途中であきらめない執念です。それから、状況があまり固まっていなくても、とにかく一歩でもいいから歩きだすこと。誰か一人が動き出すことで、物事は進みはじめるものなんです。その一人に自分がなる。もちろん、勇み足みたいなことも多々ありますよ。でも、何もしないで後悔するよりはずっとマシです。

――スキルよりやる気だと。

水谷　スキルというのは日進月

「MERRY PROJECT（メリープロジェクト）」とは、世界のさまざまな場所に出かけていき、そこに暮らす人に「あなたにとってMERRY（楽しいこと、幸せな瞬間、将来の夢など）とは何ですか」と問いかけ、返ってきた笑顔とメッセージを集め、それをみた人にもMERRYになってもらうという活動のこと。水谷さんは1999年の活動開始以来、世界25カ国で3万人以上の笑顔を撮影。これらは同時多発テロ直後のニューヨーク、愛知万博などで発表され、いずれもたいへんな反響を巻き起こしてきた

小型カメラ2台で撮影するのが、水谷さんのスタイル。「「どうやって笑わせるんですか？」とよく聞かれるんですが、とくにテクニックを使っているわけでも、無理に笑わそうとしているわけでもないんです」

水谷さんが撮影した笑顔の写真は、北京オリンピックの開会式でも使われることになった。「当日、僕は事務所でスタッフと一緒に開会式をテレビで観ていました。そしてラストでついに、僕が世界で出会い、会話をし、撮影した子供たちの笑顔がプリントされた傘が次々と開かれていったのです。まるで子供たちの笑顔で世界が満たされていくようで、心が震えましたね」

森永製菓『ウイダーinゼリー』のパッケージ・デザインは、水谷氏が手がけたもの。ほかにも数多くの広告デザイン、パッケージ・デザインを手がけてきた

撮影後、水谷氏は現地の人と一緒にゴミ拾いをするようにしている。「パリのエッフェル塔の前でも、カイロのピラミッドの前でも、ほかにも世界20カ国以上でゴミ拾いをしてきました。ゴミを拾うことよりも、拾っている姿をみてもらうことで、『ゴミを捨てないMERRYな空気』をつくるのが目的です」

『「思いを実現する力」は、どんなスキルよりもずっと重要なものです』

KOJI MIZUTANI

1951年、愛知県生まれ。日本デザインセンターを経て、83年、水谷事務所を設立。その後、東京ADC賞、JAGDA新人賞、N.Y.ADC国際展・金賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ展金賞・特別賞など、国内外の数々の賞を受賞。99年、「笑顔は世界共通のコミュニケーション」を合言葉に、「MERRY PROJECT」を開始。2005年には、愛知万博「愛・地球広場」で「MERRY EXPO」を展開。2008年の北京オリンピックの開会式でも、「MERRY PROJECT」で撮影した世界中の子供たちの写真が使われた。著書に、『デザインが奇跡を起こす』(PHP研究所)がある。

歩するものなので、いま何ができるかというのは、あまり意味がないと僕は思います。ただし、やる気があれば何でもできるというわけでは、もちろんありません。自分はこれがやりたいと一方的に主張するだけでは、「あいつは学生みたいだ」と一蹴されて終わりでしょう。自分の思いをカタチにするには、周囲の人にそれを受け入れてもらう必要があります。それには、どうすればこれが実現できるかというストーリーを考え、マーケティングや根回しをすることが不可欠。これもデザインなんです。

——会社で自分の思うようなことができず頭を抱えている人には、具体的にどのようなアドバイスを送りますか。

水谷　かつての部下で、現在はドイツ系の薬品会社に勤めている女性がいます。彼女は、アフリカの難民キャンプに薬を届けるような仕事をしたいといってその会社に入ったのですが、入社してみると、日本の地方都市で病院に薬を売ることしかやらせてもらえなかった。それで、意気消沈して僕のところに電話をかけてきたので、僕は彼女に、まずいまの仕事でちゃんと成果を出すこと、そのうえで自分のほんとうにやりたいことを企画書にして直属の上司、支社長、日本の社長、ドイツ本社の会長と順番に送るようにいいました。そうすれば、必ず説明にこいと連絡がくるはずだし、そこまでやってもまるで反応がないようなら、そんな会社は辞めればいいのです。

とにかく、まずアクションを起こしてみること。そうすれば、少なくとも「思いを実現する力」は確実に鍛えられます。そしてこの力は、どんなスキルよりもずっと重要なものなんです。

資本主義からメリー主義へ

——世界には日本よりはるかに経済状況が悪くても、人びとが力強くイキイキと笑顔で働いている国があります。そういう国の人たちと日本のビジネスマンとは、何が根本的に違うのでしょうか。

水谷　彼らは食べ物がない、住むところがないといった絶望と背中合わせに生きています。それゆえ、希望というものをはっきり見据えながら生きることができるのです。だから、被災地にも笑顔がある。それもとびっきりの笑顔。なぜならそこでは絶望という影が際立っているからです。影があるから、光の存在が認識できるといってもいいでしょう。

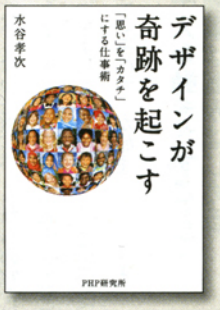
ひるがえって日本をみてみると、不況を嘆きながらも多くの人は、明日の衣食住に困っているわけではありません。つまり、この国は始終、薄ぼんやりした明るさに包まれているので、人びとは影も光もわからなくなっているのです。

そして、そういう状態に慣れてしまうと、影を影として受け止めたうえで、光のありかを探すという人間力も失われてしまいます。そうなる前に、日本のビジネスマンの目を覚ましたい。僕が『デザインが奇跡を起こす』を書いた理由はそこにあります。

——水谷さんは、この日本をどのようにデザインしていきたいと思っているのですか。

水谷　お金やモノが幸福の尺度になる時代は、早晩、終わりを告げます。では、次なる尺度は何か。それはメリーです。たとえばクルマのセールスマンなら、これまではたくさん売って表彰されたり、給料が上がったりするのが働く動機でした。これからは、お客さんからの感謝の言葉や、笑顔をどれだけもらえるかを、みんながめざすようになるべきなのです。「和顔愛語(わげんあいご)」というブッダの言葉があります。笑顔とやさしい言葉を与えたら同じものが返ってくるという意味です。僕はこの国を資本主義から、みんなが和顔愛語で生きるメリー主義にデザインし直したいと考えています。この先十年、二十年かかるかもしれませんが、必ず実現させてみせますよ。

『デザインが奇跡を起こす』
PHP研究所／税込み1,470円



ビリ社員から這い上がろうともがき続けた新人デザイナー時代、富と名声を手にしてもなぜか虚しかったバブル時代、「MERRY」との出合い、そして北京オリンピック……。少年時代から現在までの自らの足跡を振り返りながら、いまを生きる後輩たちに熱いメッセージを贈る。数々の壁を突破し、自らの思いを実現してきた水谷氏の言葉に、大きな勇気とパワーをもらえる1冊。